

私たちと聖書

We and the Bible

第4集



私たちと聖書（第四集）

著者 峰本義明

はじめに

聖書はおよそ千九百年前に完成して以来、様々な言語に翻訳されて世界中で読み継がれています。多くの人々が聖書に影響されました。その結果、私たちの身近なものに聖書の影響があります。

本書では、私たちの身近な様々なものに潜む聖書の影響についてご紹介します。そして、聖書が私たちに与えて大切なメッセージを伝えていることをお知らせします。

なお、本書は伝道出版社で毎月発行している「みちしるべ」誌において、二〇一四年九月から二〇一七年一二月までの間に連載されたものを電子書籍用として一冊にまとめたものです。そのため、各テーマが一話完結の形式となっております。

ページ順に読むのも良いですが、興味のあるテーマを選んで読むこともできるよう、今回はこの形式をそのまま残して構成しました。この本が読まれた方にとって、少しでも聖書を理解する助けとなることを切に願っております。

二〇二〇年 五月

目次

正岡子規の辞世歌	4
吉野弘の「夕焼け」	6
尾崎放哉の俳句	8
きよしこの夜	10
アメイジング・グレイス	12
主よ御許に近づかん	14
矢内原忠雄	16
パスカル	18
再び・夏目漱石	20

正岡子規の辞世歌

●正岡子規の辞世歌

正岡子規は明治期に活躍した、俳人、歌人です。夏目漱石の友人で、漱石を俳句の世界に導いた人です。野球が好きという意外な面もあり、「ベースボール」が「野球」と翻訳されたのは彼の雅号が参考になったようです（子規の幼名「のぼる」にちなんで「野球（のぼる）」という雅号を使ったことがあります）。また、それまでの俳句や和歌の革新を目指し、活発な評論活動や創作活動をしました。「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」は彼の句として有名です。

子規は肺結核を患い、後に脊椎カリエスも発症して、34歳の若さで亡くなりました。晩年の3年間はほとんど寝たきりでした。彼の辞世歌の一つ「瓶にさす 藤の花ふさ みじかければ たゝみの上に とゞかざりけり」は、一日中病の床に伏して体も起こせなかつた子規だからこそ気づくことのできた情景です。それでも子規は、寝返りも打てないほどの苦痛を麻痺剤で和らげながら創作を続け、後進の指導に打ち込みました。

●パウロの辞世の言葉

イエス様の弟子であり使徒であるパウロは、当時の地中海世界を支配していたローマ帝国の皇帝ネロによる迫害を受け、無実の罪で逮捕されました。パウロは以前にもローマ帝国によって逮捕され、皇帝の前に引き出

されたことがあります。しかし、2度目の逮捕はキリスト者に対するはつきりとした悪意に基づいたものであり、パウロは自らの殉教の時間が近づいていることを悟りました。

その時、パウロは若い信者テモテに書いた手紙で、自らの心境をこう綴りました。

「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」(テモテへの手紙第二・4章6、7節)

パウロははつきりと自分の死期を悟っています。それなのに、彼の筆致はあくまでも穏やかです。パウロが回心するきっかけとなったステパノの殉教の際も、ステパノははつきりと「主イエスよ。私の霊をお受けください。」(使徒の働き7章59節)とすることができました。死の間際で、クリスチャンたちはどうしてこのように穏やかでいることができるのでしょうか。

それは、彼らが罪の解決をし、イエス・キリストを信じる信仰による救いを得ているからです。「罪から来る報酬は死です。」(ローマ人への手紙6章23節)とある「罪」を、クリスチャンは解決しています。なぜなら、イエス様が私たちの身代わりに十字架で贖ってくださいったからです。

●イエス様の十字架上の言葉

イエス様はご自身が十字架にかかっている時にこう言われました。

「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカの福音書23章34節)
イエス様が私たちの罪を身代わりに背負って、十字架での裁きを受けてくださいました。だからパウロもステパノも、そしてあなたの身近にいるクリスチャンたちも、死の解決を持っています。あなたはいかがですか？

吉野弘の「夕焼け」

●吉野弘「夕焼け」

山形県出身の吉野弘という詩人がいます。人が生まれてくることの本質を捉えた「I was born」など、有名な作品がいくつもあり、国語の教科書にもよく取り上げられています。

その吉野弘に「夕焼け」という詩があります。詩人である「僕」は夕方の満員電車に乗っています。ある娘さんが座っていました。その前にお年寄りが立ちました。娘は立って、席を譲りました。礼も言わずにお年寄りは次の駅で降りました。すると、別のお年寄りが娘の前に押されてきました。娘はまた立って、席を譲りました。お年寄りは次の駅で礼を言いつて降りました。そして三たび、別のお年寄りが娘の前に押し出されました。娘は、今度はうつむいたまま、席を立ちませんでした。「僕」は次の駅で電車を降りたので、その結果はわかりません。「やさしい心に責められながら 娘はどこまでゆるけるだろう。下唇を噛んで つらい気持ちで美しい夕焼けも見ないで。」と詩は終わります。

私はこの詩を初めて読んだ時、激しく感動しました。それは、このうつむいたまま席を立つことのできなかった娘の辛い気持ち、痛いほどにわかったからです。たとえ三度目でも席を譲るべきだとわかっていてもできず、「やさしい心に責められ」る痛みが切実に共感できる、「夕焼け」とはそんな詩です。

●良心と一緒に証するもの

娘の心を苛んだものの一つは「良心」でしょう。しかし聖書は、私たちの心の中に、良心とは違うものがあることを教えます。

「彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。」
(ローマ人への手紙2章15節)

ローマ人への手紙を書いたパウロは、私たちの心には「律法の命じる行ない」が書かれている、と教えます。つまり、人は生まれながら何が正しいことを知っている、というのです。しかも、「良心もいっしょになってあかし」するのです。私たちの心にはなすべき正しいことが初めから刻まれており、さらに良心がその正しいことから逸れようとする私たちを責めます。私たちが罪を犯す時に感じる、心の責めは、これが原因だったのです。

●神様の存在

このことは、真の神様が存在することの証明にもなります。もし、人が他の生物と同じように、自らの存在や種の存続のみを考えるだけのものならば、こうした「正しい心」は邪魔者です。進化論が正しいならば、種の存続に不都合なものは淘汰されるはずですが、しかし、現に私たちは正しいことを知っているし、あの「娘」は美しい夕焼けを見上げることもできないのです。それはすなわち、真の神様が存在し、その神様が私たちの心に正しさを刻まれたからなのです。どうお考えになりますか？

● 「咳をしても一人」

俳句といえど「五・七・五」の十七音からなり、季語と切れ字（「くかな」など）があるものと決まっています。しかし、「自由律俳句」という、こうした制約に一切とらわれない句を作った俳人たちもいます。その中の一人が尾崎放哉です。彼は大正時代に活躍し、その自由な作風は多くの人に愛されています。

この放哉の代表句の一つがこれです。国語の教科書にも載ったことがあります。

咳をしても一人

何とも人を食ったような、自由気ままな句です。しかし、それでいてこの句が表そうとしているものはよく伝わるのではないのでしょうか。それはもちろん「孤独」です。時は夜中でしょうか。一人だけの部屋で、風邪気味なのか少し咳き込みました。しかし、「大丈夫？」と声を掛けてくれる人はそこにはいません。たった一人で部屋にいる、その寂しさ、悲しさを、この句はよく捉えていると思います。

● 「荒野のペリカン」

「孤独」は時に人を深い思索へと導きます。しかし、基本的に人は「孤独」に耐えられません。孤独になる理由は人それぞれとはいえ、私たちにとって独りぼっちでいることは辛いものです。

詩篇102篇は「悩む者の祈り」という表題が付いています。その中に、印象的な表現が出てきます。

「私は荒野のペリカンのようになり、廃墟のふくろつのようになっています。私はやせ衰えて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようになりました。」(102篇6、7節)

詩篇の作者は敵によって悩まされ、苦しんでいます。彼を助ける者はありません。まさに孤立無援な状況を、彼は「荒野のペリカン、廃墟のふくろつ」と表現しました。私はここから、荒野にたたずむペリカンの姿を思い浮かべます。たった一羽だけでがらんとした荒野に立っている姿は、ある時の孤独な私そのもののようです。

● 「あなたの家に泊まることにしてある」

おそらく、あなたは「孤独」です。特に、あなたがまだ神様を信じていないのならそうです。あなたを造り、あなたとともにいることを望まれている神様を受け入れていないのですから、本質的にあなたは孤独です。しかし、そんなあなたへも、神様は誘いの言葉をかけておられます。

誰からも相手にされず、お金だけを追求していたザアカイという人は、イエス様からこの言葉をかけられた時、ビックリ仰天したことでしょう。

「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」(ルカの福音書19章5節)
イエス様は孤独だったザアカイの真の友となってくださいました。自分の名前を呼んでくださったばかりか、嫌われ者の自分の家に泊まろうと言ってくださいだったのでした。ザアカイの喜びはいかばかりだったでしょう。他の誰も、あなたの本質的な孤独を癒やすことはできません。イエス様だけが、真実のあなたの友なのです。

このイエス様を、あなたの心の中に迎え入れませんか？

きよしこの夜

● 「きよしこの夜」が生まれた夜

クリスマスになるとよく歌われるのが「きよしこの夜」です。この曲は今から約二百年前のクリスマス前夜、オーストリアのザルツブルグに近い小さな町で生まれました。作詞者は若い田舎司祭のヨゼフ・モール、作曲者は学校教師兼オルガン奏者のフランツ・グルーバーです。クリスマス・イブの夜は、本来ならば教会のパイプオルガンが重々しく鳴り響くのですが、どうやらネズミがオルガンのふいこの布をかじったらしく、演奏できなくなっていました。どうしたらよいかと考えた二人は、モールが何気なく書いた歌詞に感銘を受けたグルーバーが曲を付け、ギターの伴奏で少年聖歌隊に歌わせました。「きよしこの夜」の誕生です。

きよしこの夜 静けき今宵 ものみな眠り 目覚めるはただ

愛しあう二人の聖夫婦ばかり 捲毛の髪の毛のいとしい御子は 眠りたもう いと安らかに

(ポール・ギャリコ『きよしこの夜』が生まれた日』より)

素朴ながらも純粹な思いの満ちたこの歌は、作者たちは忘れてしまったのですが、グルーバーが残した自筆楽譜が人手に渡り、巡り巡って世界中に広まったのです。

● イエス様の生まれた夜

イエス様がお生まれになった夜、それは残念ながら12月ではありません。なぜなら、その時に野宿をしていた羊飼いたちに御使いが現れたからです。野宿ができるくらいですから、ある程度暖かい季節だったのでしょう。ともかく、羊飼いたちに現れた御使いは素晴らしい喜びを知らせました。

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」
(ルカの福音書2章11節)

イエス様の誕生はつくづく不思議です。天地万物の創造主であられる御方が被造物である人間となられました。全知全能なる御方が無力な赤子となられました。永遠の存在であられる御方が33年半の限られたご生涯をお過ごしになりました。「きよしこの夜」で歌われるイエス様は安らかに眠っておられます。しかし、それはまさに奇跡中の奇跡である出来事なのです。何故でしょうか。それは「あなたがたのために、救い主がお生まれに」なる必要があったからです。私のために、そしてあなたのために、イエス様はお生まれになりました。

●新しく生まれること

イエス様は老人のニコデモにこう言われました。

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」
(ヨハネの福音書3章3節)

「新しく生まれる」とはイエス様を救い主と信じて救われることです。あなたがこの世に生を受けた時に家族は喜んででしょう。同様に、あなたがイエス様を信じて救われる時、天に喜びが湧き起こります(ルカの福音書15章7節)。あなたのためにお生まれになったイエス様を、ぜひご自身の救い主と信じてください。

アメイジング・グレイス

● ジョン・ニュートンの回心

「アメイジング・グレイス」という有名な賛美歌があります。アメリカをはじめ世界中で歌われていますが、これを作詞したのはジョン・ニュートンという人です。彼は牧師でしたが、それ以前には奴隷貿易に従事していました。ニュートンの母は敬虔なクリスチャンでした。そして、幼い息子が神様を信じるようにと聖書の話を中心に伝えました。その母はニュートンが7歳の頃に亡くなりました。その後、ニュートンは父と同じ船乗りとなり、奴隷運搬船に乗り込むようになったのです。

ニュートンが22歳の時、乗った船が嵐に遭って浸水し、転覆の危機に見舞われました。今にも海に吞まれそうな船の中で、ニュートンは必死に神様に祈りました。それは母の死後初めての祈りでした。すると流出していた貨物が船倉の穴を塞いで浸水が弱まり、奇跡的に遭難を免れました。それをきっかけにして彼は回心し、その後は生活態度を改め、ついに牧師になったということです。彼が作詞したアメイジング・グレイスは、そんな彼の経験を反映したものです。

驚くべき恵み！なんと甘美な響きだろう。

私のように悲惨な者を救ってくださいました。

かつて、私は迷ったが、今は見つけられ、

かつて、盲目だったが、今は見える。

●パウロの回心

ジョン・ニュートンのように劇的に信仰を持つ人は時々いますが、聖書に出てくる使徒パウロはその代表でしょう。パウロは、以前はサウロと名乗っていました。彼はクリスチャンを迫害する人でした。そのサウロに、あろうことかイエス様が現れてくださいました。サウロがクリスチャンたちを逮捕しようとダマスコという街に行く途中、天からの光が彼を照らし、「サウロ、サウロ」という声が天から聞こえました。

「彼が、『主よ。あなたはどなたですか。』と言うと、お答えがあつた。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』」（5節）

サウロが迫害していたイエス様は、間違いなく天におられ、神様に受け入れられています。それはすなわち、この方こそ本当に救い主だということです。サウロは回心し、これ以降はイエス様をキリストだと宣べ伝える大使徒となりました。パウロの回心こそは、イエス様が、ひいては聖書が信頼に足るものだということの証拠です。

●悔い改めの必要

あなたは、ジョン・ニュートンやパウロのような劇的な回心を経験していないかもしれませんが、しかし、そうだとしても何の問題はありません。「悔い改め」はギリシャ語で「メタノイア」といいます。「メタ」は「変える」、「ノイア」は「考え」という意味です。すなわち「悔い改め」とは「考えを改める」ということです。あなたが自らの罪を認め、罪の人生から神様とともに歩む人生を生きようと「考えを改める」時、あなたは悔い改めたのであり、救われたのです。

主よ御許に近づかん

●タイタニック号の沈没

1912年4月14日の深夜、北大西洋上の暗い海の上に冰山が何物かとぶつかる音が響きました。皆さんよくご存じの、タイタニック号です。処女航海中だったタイタニック号は冰山と接触し、致命的な傷を負いました。生じた亀裂から海水が浸入し、不沈船と呼ばれた船は2時間40分後に沈んでしまいました。船には乗員・乗客合わせて二二〇人以上が乗っていましたが、彼等に乗せるのに十分な救助ボートを積んでおらず、結果的に二五三人という犠牲者が出た、当時最悪の海難事故でした。

沈みゆく船の上では、船員たちが決死の作業で乗客を救助ボートに乗せていました。そんな中、乗客たちがパニックに陥らないように船船付属の室内楽団員が音楽を演奏し始めました。様々な曲が演奏され、乗客を励ました。そしていよいよ船が沈もうとするとき、彼等が演奏したのは「主よ御許に近づかん」という賛美歌だったそうです。

主よ御許に近づかん 登る道は十字架に

ありともなど悲しむべき 主よ御許に近づかん

楽団のマスターはクリスチャンだったようです。彼等は主イエス様に会うのを楽しみにできたのでしょうか。

●殉教者たち

クリスチャンたちはこれまでに多くの者が迫害に遭いました。中には皇帝ネロの大迫害によってむごたらしい死を遂げた者もいます。迫害の様子は聖書にもこう記されています。

「また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。」（ヘブル人への手紙 1・1章 37、38節）

この「のこぎりで引かれ」というのは予言者イザヤのことを指しているようです。また、パウロも「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。」（テモテ第二の手紙・3章 6節）と言った後、死刑にされていきました。

多くの殉教者たちが死を目前にしても恐れることなく殉教していきました。私の好きな聖歌 473 番に、殉教者たちが火刑の煙にむせびながら「イエスは私の全てなりき」と叫ぶ様子が歌われています。彼らは全て、主イエス様を見上げていました。そして、自分が死んだ後はイエス様の御許に挙げられることを確信していたのです。

●死後の救い

殉教者たちは特別ではありません。幸いにも迫害のあまりないこの日本でも、クリスチャンたちは死後の救いの確信を持っています。クリスチャンがバプテスマを受ける前の信仰確認で、「今、あなたが死んだら、あなたはどこにいますか?」と問われることがあります。私は喜んで、「イエス様の御許にいます」と答えることができます。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」（ヨハネの福音書 11章 25、26節）

あなたはいかがですか?

●矢内原忠雄という人

日本の経済学者で矢内原忠雄という方がいます。矢内原は植民政策学の専門家であると同時に、内村鑑三の弟子で、無教会主義のキリスト教の指導者でした。戦前矢内原は東京大学の教授となつて植民政策を教えていましたが、その考え方が当局に問題視され、東大教授の職を追放されました。しかし、矢内原はひるむことなく、キリスト信仰に基づく信念を平和主義を説き続けました。彼は戦後に東大教授に復職し、さらに総長も務めました。また、矢内原は聖書講読会を長く主催していましたが、職場や講読会での態度は厳格そのものでした。

『サザエさん』の作者である長谷川町子は矢内原と親交がありました。彼女は矢内原のエピソードを残しています。ある時、聖書講話中に誰かが欠伸をした際に、矢内原は「不真面目な！ 出て行きなさい！」とすさまじい雷を落としたそうです。そんな矢内原忠雄ですが、知人の結婚式で長谷川町子と初めて話をしたとき、「ぼくの机の上に聖書とならべてサザエさんがおいてあるのヨ」と言ったそうです。厳格な態度と温かな人柄が同居していた人、それが矢内原忠雄であるようです。

●イエス様の宮清め

皆さんはイエス様というと、どんな姿を思い描きますか？ おそらく、穏やかな表情で民衆に手を差し伸べてお

られるイラストなどを想像すると思います。それもイエス様のお姿だったでしょうが、ある面、イエス様は大変厳格な方でもありました。

公生涯の初期に、イエス様はエルサレムにある神殿に行かれました。そして、その中に家畜を売る人や両替人がいるのをご覧になると、細なわで鞭を作つて家畜を追い出し、両替人の金を散らし、鳩を売る者に「それをここから持つて行け。私の父の家を商売の家としてはならない」（ヨハネの福音書2章16節）とおっしゃいました。

このイエス様の態度は、優しく柔和なイメージのイエス様とは相容れない感じがします。しかし、これもイエス様のお姿です。弟子たちは「あなたの家を思つ熱心が私を食い尽くす」（17節）というみことばを思い出したとあります。イエス様は神様を第一とするお方であり、人々の神の宮に対する間違つた対応には毅然として正すのです。そうした方こそ、信頼に値するのではないのでしょうか。

驚くことに、この「宮清め」の事件は2回繰り返されました。公生涯の終わりにエルサレムの宮に入った時も、イエス様は同様に「宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された」（マタイの福音書21章12節）とあります。イエス様の厳格さと神様に対する熱心さはずっと変わらなかつたのです。

● 第一にすべきこと

これらのことは、私たちが何を第一にすべきかを教えてくれます。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」（マタイ6章33節）とあります。他者への愛ももちろん大切です。しかし、まず持つべきなのは真の神様への愛です。

パスカル

●炎のような回心

恵みの年1654年、11月23日、月曜日。(中略) 哲学者や学者の神ではなく、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。確信、確信。万感の思い、喜び、平安。イエス・キリストの神。「あなたの神は私の神です」(後略) これは、フランスの思想家ブレーズ・パスカルが残した言葉です。圧力の単位で名を残す(「今日の気圧は〇〇ヘクト・パスカル」と言いますね) ように、パスカルは科学者であり、哲学者です。同時に、彼はクリスチャンでもありました。

パスカルは早熟な天才でしたが、若い頃は上流社会の様々な楽しみを求めていました。しかし、やがてそれにも幻滅を感じ、はかない楽しみにも、偉大な業績の名声にも、彼は満足できなくなりました。そのような時、夜中に聖書を読んでいたパスカルは、まるで炎の中で神が自分に現れたかのような感覚に打たれ、神の臨在を感じてイエス様へ自分を明け渡すことができました。

パスカルはこの時の感動を忘れまいと、冒頭の言葉を羊皮紙に書き留め、それを自分の着物の襟の中に縫い込めていました。その紙は、39歳で早世した彼が着ていた服から見つけ出されたものだそうです。

●救われた瞬間…?

パスカルのように、自分は今この瞬間に救われたと感じることはできるのでしようか？ それは、できる人もいるでしょうが、できない人もいる、と考えられます。イエス様はこう言われました。

「風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によつて生まれる者もみな、そのとおりです。」(ヨハネの福音書3章3、8節)

私は、これは救われる瞬間は人には分からないものだ、ということだととらえています。私は中学生の時に福音を聞いたのですが、今から考えると、福音を聞いたその時に、私はそれを受け入れることができたと思います。しかし、当時の私は救いの喜びを感じられない自分を見て、果たして自分は救われているのだろうか？と確信が持てませんでした。この期間は約5年間続きました。

●救いの確信とは

しかし、人は感情によつて救いを確信するではありません。つまり、救われたからと言って、「ああ、私は救われた！」という喜びが必ず伴うわけではありません。では、何によつて救いを確信することができるのでしょうか？ それは、みことばによるのです。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ人への手紙10章9節)。

天地を創られた真の神様のみことばである聖書がこう断言しています。ですから、あなたがイエス様を救い主だと受け入れた時、あなたは救われるのです。たとえ、パスカルのような劇的な瞬間はなくても、変わらぬいみことばによつて、あなたの救いは確実なのです。あなたは救いの確信を得ていますか？

●『三四郎』の「迷子」

この連載の最初に夏目漱石の『三四郎』を取り上げました。『三四郎』は、熊本から東京の大学に進学した小川三四郎が、知り合った里見美禰子という女性に振り回される場面を印象深く描いています。連載の第一回では三四郎が美禰子と別れる場面に注目しましたが、他の場面にも聖書と関連することがあります。

三四郎は知り合いになった広田先生という高等学校の教師の引越しを手伝いに来ています。そこへ広田先生の代わりに、大学の池の近くで会った若い女性が来ました。それが美禰子です。これをきっかけに三四郎は彼女と親しくなります。そして、他の友人と四人で菊人形を見に行つた帰り道、美禰子が三四郎に「迷子の英訳を知っていらしつて」と尋ねます。意外な問いに戸惑う三四郎との間にこんな会話が続きます。

「教えて上げましょうか」「ええ」「迷える子(ストレイ・シープ)解つて?」

●いなくなった一匹を捜す愛

ちよつとドキドキする場面ですね。この「ストレイ・シープ (stray sheep)」は直訳すると「迷える羊」という意味です。これは聖書の次のみことばが元になっています。

「あなたがたはどつち思えますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとした

ら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。」(マタイの福音書18章12、13節)

迷える小羊を捜し歩く優しい羊飼いの、というイエス様に対するイメージはこのみことばから来ています。

この羊飼いの例えはマタイの福音書とルカの福音書の二箇所に記載されています。マタイでは、小さい者が滅びるのは神の御心ではない、という流れの中で語られています。ルカでは、人が救われたときには天で大きな喜びがある、という流れの中で語られています。つまり、神様はあなたが滅びるのを決して望んではおらず、あなたが主イエス様による救いを受け入れたとき、大いに喜んでくださるのです。

●九十九匹の安否は…

ところで、この箇所がよく聞かれる質問があります。それは「山に残された九十九匹の羊は大丈夫なのか？」というものです。山に残されて、今度はこの九十九匹が狼などに狙われてしまうのではないのでしょうか？

心配には及びません。この例え話の前後を読むと、神様は滅びるのを望まない方だと分かります。それならば、私には思いもつかない方法で、神様はこれらの羊たちをも守ってくださいます。

「彼はいたんだ羣を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。」(イザヤ書42章3節)

イエス様は迷う私たちを捜し歩いてくださいます。見つけたら大喜びなさいます。そして、弱い私たちをいたわるお方です。どうか、主イエス様をお信じになりますように。



聖書はあなたに知恵を与えて、
キリスト・イエスに対する
信仰による救いを受けさせることができます。

—テモテ第二の手紙3章15節—

私たちと聖書（第4集）

2020年5月1日

著 者：峰本義明

編 集：みちしるべ編集室
